

○被害者遺族 A 氏(男性) (平成 20 年(当時 9 歳)、父を交通事故で失う)

[要旨]

当時の感情と周囲のサポートについて

小学 4 年生(当時 9 歳)の時に、父親を交通事故で亡くしました。9 歳ということもあり、具体的な交通事故の内容については知らされていません。

事故当時一番不安に思ったことは、突然父親を亡くし、今後の生活はどうなるのだろうかということでした。そして、事故のことは考えたくないと思っていました。周りの人に事故について聞かれたり、思い出してしまうようなことは、極力避けたいと思っていました。

このような感情の中で、小学生から現在(大学 3 回生)まで、主に 4 つのサポートを受けてきました。

まず、小学校側の配慮で、同級生に、僕に対しては父親が亡くなった話題に触れないようにという連絡網が回っていたようです。僕は、極力触れてほしくないと思っていたので、この連絡網は非常に有り難かったと思っています。

また、週 1 回ほど、小学校側の配慮で、常駐していたカウンセラーに個人面談という形で話を聴いてもらうという機会を設けてくださいました。

金銭面での支援については、高校時代からは交通遺児育英会から援助を、大学生からは日本学生支援機構で給与型の奨学金をいただき、大学に通わせていただいております。

そして、親族からの支援ですが、祖父が母の家事などを手伝ってくださいました。

本当に望んでいたサポートとは

しかし、個人面談については少し疑問を抱いていました。正直、「なんでそんなことするの?」と思っていました。特別扱いされているのではないかと感じていました。僕だけ変なのかな、僕ってかわいそうなのかな、というふうに感じていました。

僕としては、カウンセラーをつけてもらうよりも、友達と遊んでいる方が気が紛れていたように思います。週 1 回ではあっても、個人面談ということが少し重荷になっていました。

僕自身がしてほしい支援は、「特別扱いをしない」ということだったと思います。しかし、支援全体としては、特別扱いをしてほしい方もいらっしゃると思います。

年齢についても考慮していただきたいし、僕には兄が 2 人いたことで心強い部分がたくさんありましたので、家族構成についても考慮をしていただきたいし、その子の性格についても考慮すべきだと思います。いろいろな面を考慮した上で、支援を考えていただきたいと思います。